

# VOL.4 あかねさす

## EU - 日本学 NEWS

Program for EU-Japanology Education and Research (PEJER)

目次

- 1 2年目を迎えた「EU-日本学教育研究プログラム」
- 2 第2回 KU ワークショップ開催報告
- 4 春学期フィールドワーク(京都)実施報告

### 2年目を迎えた「EU-日本学教育研究プログラム」

昨年度、「関西大学 EU - 日本学教育研究プログラム」が文部科学省の大学院教育改革支援プログラムに採択されました。今年度は2年目にあたり、昨年の経験を踏まえながら、基本的にはEU-日本学講義、日本学フィールドワーク、学術コミュニケーション・トレーニング、KU/EU ワークショップという、プログラムで実施しております。昨年とほぼ同様な受講生の参加があり、大学院文学研究科の活性化に寄与していると思います。

このプログラムの目玉はやはりKU/EU ワークショップであり、ヨーロッパのルーヴェン・カトリック大学やデュッセルドルフ大学の教員や学生との学術交流が魅力になっています。

相手大学が日本学専攻ということもあり、日本語使用も可能ですが、院生諸君にはできるだけ英語でのプレゼンテーションが求められておりますので、これは国際化時代のなかで重要な意義のある試みだといえます。

とくにEUワークショップにおいては、テーマ設定、発表内容の作成、英訳および添削修正、英語コミュニケーション能力の訓練という準備をへて、ベルギーでのプレゼンテーションをおこないますが、このスケジュールは、通常の授業では味わえない多くの刺激を学生諸君に与えることとなります。昨年度の参加学生の反省会では、ベルギーでの体験はたいへん大きなインパクトがあり、いい思い出になったという感想を聞いています。

異文化理解が21世紀の重要なテーマですが、それは机上の学問ではなく、現場での経験を踏むことによってはじめて実感できます。あまり専門的すぎるテーマではコミュニケーションが困難であり、相手の理解を得ることができません。自分の研究をいかに伝えるかが重要な課題になります。したがって個人レベルでの国際交流という意味においても、創意工夫が求められますので、今年も参加学生の皆さんの奮闘を期待しています。

(EU-日本学教育研究プログラム代表代行 文学部教授 浜本 隆志)

### 春学期開催行事一覧

日時	行事内容
2009/4/3	EU-日本学教育研究プログラム 履修ガイダンス
4/30	KU・EUワークショップに関するガイダンス
5/12	EU-日本学講義 特別講演会「EUとドイツ」 講師：クラウス・フォンダング先生 (ドイツ・ジューゲン大学名誉教授)
5/30～ 5/31	日本学フィールドワーク『京都フィールドワーク』
6/24	日本学学術コミュニケーション・トレーニング デュッセルドルフ大学とのテレビ会議
7/3～ 7/5	第2回KUワークショップ
7/7	EU-日本学講義 特別講演会「移民社会としてのドイツの現状と課題」 講師：柳原 初樹先生 (甲南大学国際言語文化センター准教授)
7/13～ 7/14	第2回EUワークショップに向けての英語プレゼンテーション面接
7/18	日本学学術コミュニケーション・トレーニング 特別講演会「日本の多言語社会とコミュニケーションー意識、政策、実態ー」 講師：オストハイダ・テーヤ先生 (関西学院大学准教授)

### 受講者数一覧

	英文学	国文学	芸術学 美術史	哲学	フランス文学	日本学・アジア史	史学	ドイツ文学	文化共生学	映像文化	留学生等	計
フィールドワーク(1)		7				3		1				11
フィールドワーク(2)		7				2		1				10
フィールドワーク(3)				1			1	2				4
フィールドワーク(4)				1			1	1			1	4
EU-日本学講義(1)	2	7	1		1	3		1	1	1		17
EU-日本学講義(2)	1	5	1		1	3		1		1	1	15
学術コミュニケーション(1)	1	7	1		2	4		1				16
学術コミュニケーション(2)	1	6			1	2		1			1	12
学術コミュニケーション(3)				1				1				2
学術コミュニケーション(4)				1				1				2



テレビ会議の様子

# KUワークショップ 開催報告

平成21年7月3日(金)～7月5日(日)

今年で2回目を迎えたKUワークショップは、EU諸国において日本研究を牽引するW.F.VandeWalle先生をお迎えして、EUで「日本」を研究する若手研究者と本学大学院で学ぶ学生が共同研究発表会を開催しました。W.F. Vande Walle先生には、第1日目の記念講演会において、日欧美に関する最新の研究成果をご講演いただいただけでなく、共同研究発表会においても貴重なご意見を頂戴しました。テーマごとに組んだセッションでは、ベルギー・イギリスの大学に在籍する若手研究者、イギリス・イタリアから日本の大学に留学している若手研究者、そして本学大学院生が活発な議論を交わしました。今回は、発表者だけでなく、司会者とディスカッサントにも、事前に打ち合わせなどを行ってもらうことによって、より活発な議論を展開することができました。3日目は、奈良にて、日本美と伝統に触れるフィールドワークを実施しました。

## ● プログラム

2009年7月3日(1日目) 会場：関西大学千里山キャンパス第1学舎A301会議室

### 記念講演

W.F. Vande Walle 氏 (ルーヴェン・カトリック大学日本学科教授) 「石と鉄の文明」と「紙と竹の文化」—金子光晴の観た美の東西—

### セッション1：EUから見る「日本」描写

司会 山口 哲史 (EU-日本学教育研究プログラムリサーチ・アシスタント、関西大学大学院文学研究科史学専修) ディスカッサント 溝井 裕一 (関西大学非常勤講師)

崎山 円 (関西大学大学院文学研究科ドイツ文学専修) 「ドイツから見た典型的な日本 —ガイドブックから見た日本—」

富沢・ケイ・愛理子 (ロンドン大学 SOAS 美術考古学科) 「菱田春草 (1874-1911) —明治後期における古画の模写による日本画革新について—」

### セッション2：日本宗教の諸相

司会/ディスカッサント 山口 哲史 司会 多田 正生 (関西大学大学院文学研究科国文学専修) ディスカッサント 川崎 千嘉 (関西大学大学院文学研究科国文学専修)

Elizabeth Tinsley (大谷大学大学院文学研究科仏教文化専攻) 「図像化される神—神像の作製に果たした中世高野山僧侶のビジョン・託宣の役割について—」

辻 陽史 (関西大学大学院文学研究科国文学専修) 「義経伝説における静御前の役割」

参加者：53名

2009年7月4日(2日目) 会場：関西大学千里山キャンパス尚文館401・402講義室

### セッション3：日本考古学の多様性

司会 今西 加奈 (関西大学大学院文学研究科史学専修)

ディスカッサント 平松 良雄 (奈良県立橿原考古学研究所、関西大学非常勤講師) 井上 主税 (奈良県立橿原考古学研究所、関西大学非常勤講師)

大向 智子 (関西大学大学院文学研究科日本史学専修) 「南西諸島産ヤコウガイの行方」

福庭 万里子 (関西大学大学院文学研究科日本史学専修) 「キトラ古墳における十二支像の系譜—中国・朝鮮半島との比較—」

中東 洋行 (関西大学大学院文学研究科日本史学専修) 「比叢寺の寺域再考」

### セッション4：日本文芸の世界

司会 多田 正生 (関西大学大学院文学研究科国文学専修) ディスカッサント Elizabeth Tinsley (大谷大学大学院文学研究科仏教文化専攻)

司会/ディスカッサント 田原 都代 (EU-日本学教育研究プログラム リサーチ・アシスタント)

竹原 千尋 (関西大学大学院文学研究科国文学専修) 「太平記・平家物語における自害観の変遷」

上月 富佐子 (関西大学大学院文学研究科ドイツ文学専修) 「ヨーロッパの“死神”伝承話と落語「死神」との関連性」

### セッション5：アジアの中の「日本」—EUからの視点—

司会/ディスカッサント Nele Noppe (ルーヴェン・カトリック大学 関西大学日本・EU研究センター特別学術職員)

ディスカッサント 常本 一 (大阪国際平和センター専門職員、関西大学非常勤講師)

Hans Bergen (ルーヴェン・カトリック大学日本学科) 「南京大虐殺 論争」

Nicholas Peeters (ルーヴェン・カトリック大学日本学科) 「アジア金融危機をケーススタディとした日本の対外政策」

### セッション6：複眼的にみる日本美術—美術史学と歴史学—

司会 谿 季江 (関西大学大学院文学研究科哲学専修) ディスカッサント 中野 志保 (元離宮二条城事務所 非常勤学芸員)

Elisabetta Perini (学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻) 「18世紀の役者絵研究—江戸の勝川派の役者絵と上方との比較—」

### セッション7：個人報告

司会 郡山 暢 (関西大学大学院文学研究科国文学専修) ディスカッサント 松丸 真大 (滋賀大学教育学部准教授、関西大学非常勤講師)

酒井 雅史 (関西大学大学院文学研究科国文学専修) 「滋賀県長浜市における待遇表現—聞き手に対する素材敬語の使い分けについて—」

### 総括セッション：EU-日本学の現状と展望

司会 山口 哲史

参加者：61名

2009年7月5日(3日目)

### フィールドワーク

奈良 東大寺(大仏殿、法華堂)、奈良国立博物館、ならまち散策

参加者：9名

## KUワークショップ参加者のこえ

参加者としてセッション3の司会を務めました。考古学の発表3つがどれも私が専攻する日本古代史と時代が近いこともあり興味深く聞きました。考古学と文献史学とはアプローチ方法が異なりますが、相互に関連し合っているため、文献史学からのアプローチも参考にすればもっと広い視野で見られるのではないかと思います。今回、海外の学生の発表を初めて聞きました。色々なハンデ（日本語での発表など）がある中、準備など大変だったと察しますがどの発表も分かりやすく、良かったと思います。（文学研究科史学専修 博士課程後期課程3年 今西 加奈）

異なる分野や文化の方と話しができ、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。ヴァンデ・ヴァレ先生からは、「自害」にまつわる話として、「殉じる」ということ、たとえば、殉教を目的として来日した17世紀の宣教師たちの話や、中国や西洋の自殺の話などをご指摘いただきました。専門分野の異なる発表を完全に理解することはなかなか難しく、裏を返せば自分の発表をどうすれば分かってもらえるものができるか、今一度考えなければならぬと痛感しました。

（文学研究科国文学専修 博士課程前期課程1年 竹原 千尋）

辻氏の司会は、会場も大きく不安にでしたが、山口さんの司会を参考にさせていただき何とか形になったのではないかと思います。竹原氏の司会では、2日目の最初の発表でどのように始めれば良いか難しく感じましたが、大島先生にサポートしていただきました。

（文学研究科国文学専修 博士課程前期課程1年 多田 正生）

今回「義経物語」における静御前の役割というテーマで発表を致しました。文学以外からの視点（美術から見る理想像）もご意見いただけたので、各専修の方のいる発表会は勉強になりました。他分野の方にも理解していただけるような発表をすることも必要であると感じました。

（文学研究科国文学専修 博士課程前期課程1年 辻 陽史）

自分の研究発表に関しては、広い範囲と時代を一度に扱ったため、それぞれの図像の背景に関する知識が甘かったかと思えます。他のセッションでは多様な研究分野と考え方を広く知ることができました。特にセッション5で、EUの方から見た日本の政治・外交意識に関する認識を知る機会がありました。今後の課題と感じたことは、「EUから見た日本」という視点があった一方で、「日本から見たEU」という視点が欠けていたことです。

（文学研究科日本史学専修 博士課程前期課程1年 福庭 万里子）

参加者として、大変興味深い内容の発表を数多く拝聴でき、意義ある経験であったと思っています。専門性の高い内容には数多くの知識を授けてもらえ、海外から日本がどれだけ深い興味を持って研究されているのかを体感することができました。自身の研究においても、日本の成り立ちのみではなくヨーロッパの成り立ちについても調査して臨めば、より高次的な世界の中の日本の世界観が学べると思いました。また、自身の研究について、EUにて学ばれている方の意見を聞いたことは、これからの研究にとでも役立つ情報を得られました。貴重で非常に参考になる情報を与えて下さった教授並びに、今回日本にいらした学生の方々に、心より感謝いたします。

（文学研究科国文学専修 博士課程前期課程1年 吉國 知香）

研究を十分よく伝えることができなかつた気がしますが、このワークショップに参加することができてとても良かったと思います。色んな分野の人が参加し、色んな視点があったことは専門的なワークショップ・研究会と違い新鮮でした。今回のワークショップで、「日本の研究は幅広い！」という感想を持ちました。そして、EU-Japanologyのワークショップですので、日本と海外の「学問交流」についての発表などがあると面白いかもしれません。

（大谷大学文学研究科 博士課程後期課程 エリザベス・ティンズリー）

様々な興味深い研究発表のテーマが紹介されて、とても勉強になりました。私の研究発表に対して貴重なコメントを受けました。30分の発表は伝えたい考察をまとめる十分な時間だと思います。発表させていただいて感謝いたします。

（学習院大学大学院哲学科 博士課程後期課程 エリザベッタ・ペリーニ）

このたびはKUワークショップに参加させていただき、誠にありがとうございました。今回は日本研究をされている幅広い分野からの研究者の方々の貴重な発表を伺い、今までとは違ったアングルから自分の研究を見直す良いきっかけになりました。日本美術史という限られた分野に、文学・歴史・宗教・外交政策という切り口で分析を試みていこうと思わせる刺激的な発表の数々に感動致しました。こうした素晴らしい情報交換の場をぜひ、ロンドンでも持って頂けたら幸いです。

（ロンドン大学 SOAS 美術考古学科 博士課程後期課程 富沢・ケイ・愛理子）

一日遅れでワークショップに参加することになってしまったので、残念ながら、他の参加者の発表を聞くことができませんでした。でも、自分の研究を発表することができたのは非常に面白い経験でした。さらに、自分の研究への興味深い指摘も頂き、自分の専攻としているテーマについてももっと研究したいという気持ちにつながりました。

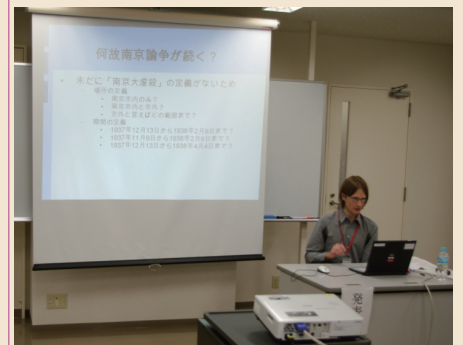
（ルーヴェン・カトリック大学日文学科 博士課程前期課程 ニコラス・ペーターズ）



W.F. Vande Walle 氏



セッションの様子



セッションの様子



総括セッションの様子

# 春学期フィールドワーク（京都）実施報告

平成21年5月30日（土）～5月31日（日）

●**担当者** 米田文孝（日本学フィールドワーク主幹）、山口哲史（リサーチ・アシスタント）、大向智子（ティーチング・アシスタント）

●**参加学生** 11名

●**実施行程**

日時	内容
平成21年5月30日（土）	阪急嵐山駅集合→清凉寺・大覚寺見学→調査
平成21年5月31日（日）	調査→京都文化博物館見学。解説を聴講

京都フィールドワークでは、「平安京における葬送地について」、「ドイツ人の京都観光」、「百鬼夜行ウォーク」など参加者が主体的に設定した調査課題に基づき、個人調査ないしグループ調査を行うことを主眼として、フィールドワークを実施しました。個人調査では、「日本研究の中の日本」という視点に留まらず、「西洋研究から見る日本」といった視点での調査もなされ、多彩な調査が京都をフィールドとして展開されました。さらに、全体見学として、初日に嵯峨野の清凉寺、大覚寺、2日目に京都文化博物館を訪問しました。嵯峨野は平安時代以来、天皇や貴族の離宮・山荘が営まれた地であり、特に、嵯峨天皇家にゆかりがあるとされます。今回、見学した清凉寺、大覚寺もそれぞれ源融（嵯峨天皇皇子）の山荘・棲霞観、嵯峨天皇の離宮・嵯峨院が後に寺院に改められたものです。庭園建築と密接に結びついた寺院建築の見学を通して、嵯峨野地域における歴史的景観の一端を体感することができました。また、京都文化博物館では、常設展の見学に先立ち、本学の卒業生である当館学芸員・南博史氏による博物館建築（別館が重要文化財に指定された旧日本銀行京都支店）、博物館設立の経緯、博物館経営に関する解説を聴講しました。「日本学フィールドワーク」科目が目標とする、学際的な「資料（有形・無形の「生の痕跡」）学」を学ぶうえで有意義な機会となりました。

(EU-日本学教育研究プログラム リサーチ・アシスタント 山口哲史)



1日目 大覚寺にて



2日目 京都文化博物館にて

## 日本学フィールドワーク参加者のこえ

これを機に研究を拡大したいという狙いがあり、これまで継続してきた装飾論研究に繋がる、別のグループに属する人物を、と思い日本旅行記を書いたクリストファー・ドレッサーに的を絞りました。日本の美術や建築、人々の生活や習慣について、神道と仏教との融和と、それぞれの気質に注目して書かれた『Japan: Its Architecture, Art, and Art manufactures』を片手に、「ドレッサー目線で拝観しよう」と、1日目は東寺、西本願寺、三十三間堂、西大谷本廟、清水寺へ、2日目は東福寺、知恩院、西陣織会館、永楽屋手ぬぐいギャラリーへ向かいました。1877年の2月に京都を訪れたドレッサーは、清水寺、西大谷本廟、耳塚、三十三間堂、東寺、西本願寺、知恩院、Temple Takinoo-no-yashiro、東福寺、萬福寺、平等院鳳凰堂を訪れ、旅行記からは、不思議の国日本を満喫する様子が伝わってきます。彼は「宗教はもはや人間に共通する感情ではない」と考え、宗教と芸術とを切り離れたのですが、異文化理解にあたっては、正に宗教こそが芸術の共通言語であると考えていたようで、この振れは、彼が知恩院をギリシャ風と評価した点からも、世界を地理学的に概観する態度が伺えます。東寺、西本願寺、知恩院の順で見て、パルテノンの柱を連想したのかもしれませんが。今回は、行程によるこうした印象への影響を想像したり、スケッチした物の選択基準について考えることができ、大きな刺激となりました。

またこれまで、寺社名不明とされあまり言及されることがなかった Takinoo-no-yashiro について、後日、行程と「龍の浮き彫り」という記述から東福寺近くにあり、この寺の管理下にあった瀧尾神社であろう、という貴重なご助言を頂戴した黒田一充教授に、謝意を表したいと思います。

(文学研究科哲学専修 博士課程後期課程1年 新谷 式子)

京都市には創建が平安時代まで遡る寺社が多く存在しています。そして、平安時代は仏教や神道などのあり方が大きく変化した時代とされています。私はこの変化を寺社の立地や信仰対象から読み取ることができないだろうかと考えました。そこで、京都フィールドワークでは創建が平安時代とされる寺社から数箇所を選び、周辺環境と信仰対象に注目して調査を行いました。その結果、京都市内の平安時代に建立された寺社にはそれぞれに特徴が見られ、その特徴は立地や信仰対象と関係している傾向が伺えました。例えば、洛中から見て平安時代に葬地として利用されていた蓮台野の入り口にあたる場所に、閻魔大王を本尊とする引接寺が位置しています。この例からは、葬地と閻魔大王というように土地と寺院との関係が意識されている様子が伺えます。管見では古代寺院にこのような例を知らず、平安時代以降の仏教の特徴が表れているのではないかと感じました。

今回フィールドワークを経験し、実際に現地に行くことでしか感じ取ることができない地形の広がりや雰囲気等というものを感ることができました。また、調査後の反省で事前学習の大切さを考えさせられ、よい経験となったと感じています。今回考えたことや経験が今後さらに発展できるよう、努力したいと思います。

(文学研究科日本史学専修 博士課程前期課程1年 中東 洋行)

## EU-日本学プログラム推進室（総合研究室棟2F）

<b>開室時間</b>	<b>住所</b>	<b>URL</b>	<b>TEL</b>
月～金	大阪府吹田市山手町	<a href="http://www2.kansai-u.ac.jp/eu-japan/">http://www2.kansai-u.ac.jp/eu-japan/</a>	06-6368-1111 (+3979)
10:00～17:00	3-3-35	<b>E-mail</b>	
		<a href="mailto:eu-japanology@cm.kansai-u.ac.jp">eu-japanology@cm.kansai-u.ac.jp</a>	